

海の明恵

——熊野信仰と明恵の接点について——

古 田 雅 憲

【はじめに】

『明恵上人遺訓抄出』⁽¹⁾に次のような言葉が残されている。

①又云高僧等ノ神異ハ不可思議ニテサテヲキツ中々志シワ
リナキハ神通モナキ人々命ヲステ生ヲ輕クシテ天竺ニワ
タリ又仏法ヲモ修行スル殊ニアハレニウラヤマシ云々
(明恵上人遺訓抄出・9丁)

明恵の資料としてはずいぶんと後代の書写ということもあつて、明恵からそう遠くない人々の祖師像というぐらゐに割り引いて考えるにせよ、そこに述べられるのは、普通の人々が捨身を通じてまた渡海を通じて仏に関わる姿への憧れ(ウラヤマシ)の心情を明恵が吐露して不思議ないという理解である。そのうえで、明恵がその生涯にわたつて天竺への渡海を願望したこと、激しく捨身を願望したことを思い出せば、この遺訓に示される憧れもあながい明恵自身

の心情に近いものであつたと見てもよいのだろうと思う。

さて捨身といい渡海といい、明恵とその周辺の人々が決して浅からぬ縁で関わつていたはずの熊野信仰を背景に置いてみたならば、稿者としては「生ヲ輕クシテ天竺ニワタ」る名もなき行者たちが「補陀落渡海」者の一群とオーバーラップしてくる印象を禁じ得ぬ。いっそ明恵「補陀落渡海願望」説を考えてよいかしれぬと思われるほどである。ともあれ小稿はそのあたりの議論の前段として、明恵の物語のあれこれに「海の習俗」とでもいうべきものが深く関わつているということを指摘した上で、それが湯浅党あるいは文覚らを媒介として紀州および熊野に淵源を持つことを想定しようとするものである。

【海の明恵】

『高山寺明恵上人行状』二種⁽²⁾によりながら明恵の生涯を辿るうちに、実にさまざまな海にまつわる物語を見いだす

ことが出来る。それらの一つは上人の直接に見聞したであろう紀州の海の風景であるが、そのほかにどうしても海の習俗とでもいうべきものの存在を背景に考えなければならぬような記述がある。

②又或人死生ヲ知ムカタメニ、遠所ヨリ所労大事ニシテ、万死一生ノヨシヲ相告ル事アリ……又上人夢ニコノ病者大海ノ上ニ黒キ灰ノ様ナル物ヲマキタル上ヲ行クニ、灰ノアル程ニテハ上ヲフミテ行ク、ナキトコロニイタリテ海ニシツミ入ルト見ルニ、忽ニ赤色ナル馬來ヲ乗セテ安穩ニ地ニヲロシテ去ト見ル、此ハ七曜ノ中ノ金曜ノ御タスケ歟ト云々（仮名行状巻上・26才 建久年間条）

黒灰のあるうちは安穩に海の上を歩行しえたが、その及ばぬところに至つて危難が訪れたという「夢」の話である。いわば灰の「呪力」に関わつての事柄であるが、このあたりについて網野善彦³が、海上利権を巡る伊勢神人と伊勢守護職との関係において述べているところが思い起こされる。

「神灰」は「神木」「神札」とともに「神敵」を調伏するための伊勢神宮の重要な手段であつたといふのである。また関連して触れられていることであるが、灰を撒いて船に憑いたもののけを払うという風習があつたり、灰や焚きさしの薪が海坊主に対する効果的な防御であると信じられて

いたり、また幽霊船に遭遇した船頭が灰を四方に撒いて難を逃れた旨の記述⁶があるのだという。伊勢神宮が古くから海に関わる側面を持つていたことは周知のとおりであるが、やはりこれら「灰」をめぐるあれこれと海の習俗とはどこかで接点を持つていたとみるべきなのであらう。

このような灰の「呪力」という点に関して『行状』に次のような類例を求めることが出来る。これは加持に使う聖なる「土砂」を「神灰」として護法童子から拝受するというようなイメージである。

③又夢ニ四人ノ護法傍ニアテ告テ云ク、我此ニ近侍テ御房ニソヒ奉リテ守護ヲナス、スナハチ一人灰ノ如クナル物ヲ給フ、灰者コレ土砂ナルヘシ云々、又或夜土砂加持ノ間タニ、夢ニ細雪ノ如クナル物ノ空中ニ充滿セリ、コレヲ見レハ微細ノ光明世界ニ充滿ス……又夢ニ春日住吉両大明神、土砂加持ノ御納受ノ夢感アリ云々（仮名行状・下39ウ）

これらの記述の真意を解釈することはなかなか難しいが、共通して灰に聖なる「呪力」を見いだそうとする精神のありようを見て取ることが可能だろうと思う。いずれも「夢」にすぎぬとはいへ、明恵にとつて「夢」は「現実」と対等であることすでに指摘のあるとおり、ここから明恵の中に

海にまつわる民俗的信仰の一端を見て取ることはあながち荒唐無稽ということでもあるまい。というのも資料③やあるいは次に掲げる資料④『高山寺縁起』の記述に見られるように、明恵の信仰に住吉神社が関わっていることなどを併せ考えるからである。

④ 社^註住吉明神 日本神也、右此神者、自上人託胎之始、与春日大神相共殊致擁護云々（高山寺縁起・11ウ）

また資料②の後半部分に金曜が海に沈みかけた人を救ったかとの記述があるが、星宿にまつわる記述は明恵の物語のなかに少なからず触れられるところである。そのようなものからも明恵と海の習俗との深い関わりは想像されるのではないかと思う。そして、当然のこと、その「海」には明恵が草庵を結んだ紀州白上峯から望まれる風景が想定されることになる。その主たる記述はたとえば次のようなものである。

⑤ 仍同六年秋比、高尾ヲ出テ、衆中ヲ辞シテ、聖教ヲ荷ヒ仏像ヲ負テ、紀州ニ下向、湯浅ノ栖原村白上ノ峯ニ一字ノ草庵ヲ立テ居ラシム、其峯ノ躰タラク、大磐石ソヒケタテリ、東西ハ長シ、二丁ハカリ、南北ハセハシ、ワツカニ一段餘、彼高巖ノ上ニ二間ノ草庵ヲカマヘタリ、前

ハ西海ニ向ヘリ、遥ニ海上ニ向テ阿波ノ嶋ヲ望メハ、雲ハ波浪シツカナリト雖モ、眼ナラキハマリカタシ、（仮名行状・上30オ 建久年間条）

⑥ 建久六季秋ノ比、専ラ高雄之交衆ヲ厭、偏ニ隱遁之閑居ヲ求ム、仍テ聖教ヲ襁負シ、仏像ヲ荷戴シテ、彼国湯浅ノ白上峯ニ攀チ路ル、先ツ西峯ニ結一字草庵ヲ結ヒ、暫カ項棲息ス、而ニ此処巢原之濱ニ近キカ故ニ、漁捕之業眼ニ遮リ、海人之首耳ヲ驚ス、修道頗ル其妨ケ有リ、此処ヲ去リテ東峯ニ移ル、其地ノ為躰大都是レ大磐石也（高山寺縁起・29ウ 原漢文）

⑤⑥はともに建久六年（一一九五）の紀州白上峯への隠遁にかかわる記述で、二十三歳の明恵が周囲の状況に失望して遁世を志向する若々しい潔さに満ちたくだりである。後者がより説明的であるが、思うところあつて下向した若い明恵にしてみれば妨げとして嫌気がさすほどに、紀州での生活に「海人」の生業がきわめて近しくあつたことがよく窺われる。同様に海との接点を窺わせる記述は『夢記』などにも見られる。

⑦ 同二月、聞此事後此郡諸人□□便思、夢云、如屏風大磐石纔少ノトカリヲ歩テ石ニ取付テ過、此義林房等前ニ過、成弁又同過之、糸野御前ハ与成□カサナリテ手モ一石ニ

取付き、足モ一石面ヲ踏被過、成弁アマリニ危思テ能々喜之テ過、安穩過之了テ行出海辺、成弁脱服將沐浴、善友御前取服懸樹、沐浴畢（夢記第六篇 元久元年条）

⑧一、同六日夜夢云、石崎入道之家前有海、々中有大魚、人云、是鰐也、一角生タリ、其長一丈許也、頭ヲ貫テ繫之、心□□、此魚可死近云々（夢記第七篇 建永元年六月条）

⑨一、同八日夜夢云、成弁行或処小兒尋常ナル五六人許アリテ以外ニ敬重之地へ下ルレハ著物ヲ取テハカセナントス云々、又自此処見遣レハ海路見渡面白無極云々（夢記第八篇 建永元年条）

⑩同十一日夜夢云、上師共成弁令下向播州船二艘アリ、一艘上師令乗給、又一艘餘同行等令乗……其後急駛風出来、船走事無極无譬程也……於是無誤付於陸地了有人来テ成弁ヲ肩ニ乗テ播州ノ御宿所ニ到付、夢心地如前々東寺修理播州御下向トモ不思、唯播州御下向ト思フ（夢記第二篇 建仁元年正月条）

糸野御前から紀伊の人々と急峻な大磐石を抜けて海岸に出た夢（⑦）、石崎入道邸前の海に現れた靈魚の夢（⑧）、某所に海路を遙か見渡す夢（⑨）、播州下向に船に乗る夢（⑩）と、これらは「夢」ではあるがやはり明恵の日常に深く関わった海の風景と考えてよいだろう。これらの記述のなされたのは建仁・元久年間（一二〇一〜一二〇五）か

ら建永元年（一二〇六）にかけてのことであるが、高雄神護寺の荒廃と湯浅一族の地頭職違乱によって不安定な立場を余儀なくされていた時期である。後鳥羽院から梶尾の地を賜つてようやく新しい段階を迎えられたのは建永元年も十一月のことになるから、この間、梶尾と糸野との往還は実に慌ただしく、きわめて厳しい精神的状況の中で紀伊の海を眺めたはずである。ちなみに二度にわたつて天竺渡海の実現を企てたのもこのころのことである。自己の存在に深く関わつて海を見つめた時期であつたといふべきか。

なお⑩は明恵周辺で瀬戸内海航路の利用が日常的であつたことを思わせる記述だが、ここに現れる播州明石の性海寺は、明恵自身が直接に関わつたかは未詳であるにしても、東大寺尊勝院系の華嚴道場であつたことで高弟義林房喜海との交渉は密であつた寺院といふ^⑪。

【湯浅党と明恵】

このような紀伊の海を物語の重要な要素として見通そうとする場合、当然のことながら、湯浅党と明恵の密接な関係に触れておかなければならない。そのあたりの事柄については諸賢の議論^⑫に多くの指摘があるので詳細はそちらを参照していただければよい。

明恵上人は早く父母を失ひ、それ以後、叔母の嫁ぎ先である崎山兵衛尉良貞や母の里である湯浅一族に養育され、

また長じて後も紀州在田郡にしばしば下向しては郡内各所で修行を重ねているが、その活動全般について殊に関わり深い人物であったのが、明恵上人にとつては叔父にあたる湯浅宗光である。たとえば正治三・建仁元年（二二〇一）前後、紀伊石垣荘内糸野における初期明恵教団の集団活動を物心両面から支えていたのがこの宗光であったようで、明恵に帰依し明恵を愛することにおいては、本人のみならず一族を挙げて深いものがあつたという。たとえば湯浅景基が明恵最初の修行地である白上峯山麓に施無畏寺を建立して明恵のために寄進するのであるが、その落慶法要が行われた寛喜三年（一二三二）四月に置文を作つて宗光を筆頭に「郡内一家」四十九人の一族連署をなしている。明恵に対する信仰が一族へ浸透していくさまを見て取るべきだろう。その地は一族の結集の場となるが、その重要な接点として明恵信仰が機能していくのである。それがアイデンティティとして一族の結束を醸成し、やがて湯浅党として紀伊国内では守護職を凌ぐほどの繁栄を示すことになる。ある意味では「持ちつ持たれつ」の関係が成立しているといつてよい。

さてその湯浅氏が熊野八庄司として熊野水軍の一翼を担つて熊野信仰と深い関わりを持つ人々であつたことも確認しておかなければならない。一族の本貫の地たる湯浅庄はその南北方向に熊野参詣道が通り、また逆川王子・久米崎王

子を内に抱えて熊野への参詣者の宿所となつた地である。そのような点でかれらと熊野信仰の接点は浅からぬものと想像されるが、実際の武力の点でも田辺別当湛快・湛増父子を中心とした熊野党・新宮党を主力とする熊野水軍の一翼を担つて最強の水軍力を誇つていたわけであるから、熊野信仰との関わりはそうとう深いものがあるだろう。熊野水軍はときに大挙して京都に群参したり伊勢神領を犯したりして、熊野悪僧、紀国悪僧あるいは熊野大衆などとよばれたが、その組織的な面では、妻帯世襲の半僧半俗の別当家に率いられた山伏の黒衣武士団と全国的な散在山伏の勧進組織からなる熊野修験道教団を形成していたと説かれている。その一翼をなす湯浅一族が、地頭職を襲いながら水軍の一翼として熊野神社に深く関わつて生をなす、いわば「海に生きる」人々であつたことは明かであろう。

このような湯浅氏と熊野信仰の接点については、またべつに『平家物語』に語られる「文覚荒行」の事績なども思い併せるべきであろう。文覚と湯浅氏の関係の浅からぬことも、例えば行慈上人浄覚（宗重三男）との師弟関係、あるいは宗光への阿氏河莊地頭職譲渡などについて知られる。そしてまた文覚と明恵の関わりも浄覚を介しての師弟関係に明白である。このような文脈の中から、湯浅氏および浄覚、文覚を媒介とした、明恵と熊野信仰の決して浅からぬ関係を想定することはもはや容易のことである。

【明恵説話のなかの熊野】

事実、明恵が熊野参詣をおこなったこと、あるいはそうして不思議なかつたことは『夢記』の次のような記事によって知れる。

⑪一、同卅日夜夢云、有一人女房、鉢盛白粥、和合白芥子以箸取之令成弁含之食之云々、其以前幽野詣事在田諸人待成弁云々（夢記第七篇 建永元年五月条）

⑫同九月十二日夜夢云、詣熊野其道宿々所、心思ハク、義淵房ヲ留置本処、如此□所ニハサカサカシクテ大切ナル物ヲト覺ユ他人ハ皆随從云々（夢記第九篇 建保六年条）

⑬一、同日夜夢云、有清澄大池、予乘大馬遊戲此中、馬ハ普通ニ能飼ル馬也、又將詣熊野テ出立云々、案云、此前二三日前夜夢、予戲云、参熊野ハヤト云フ、有真證房云、不実ニ如此云トテ呵之、即自ハ我不如此ト云テ立誓言今翻此即実欲詣、即吉相也、又大池ハ禅観、馬ハ意識也、可思之（夢記第十篇 推承久二年八月十七日条）

明恵当時の熊野信仰の実態については諸賢によってきわめて多くの指摘がなされているので^⑫こちらを参照していただければよい、ここには稿者に関わる部分ばかりを確認しておきたい。

山中他界観によるであろう熊野本宮の信仰と、海洋他界観によるであろう熊野那智・新宮の信仰とは、「隠国」として共通のイメージをまといながらも、もとそれぞれに機能していたものと見られるが、平安中期以降に本宮と那智・新宮とが結合して熊野三山としての信仰が成立するとともに、素朴なレベルでの海洋他界信仰と山中他界信仰とが「山の修験」と「海の修験」との二面性として明確に体系化されていったものごとくである。やがて浄土信仰を背景として熊野が阿弥陀あるいは観音の霊地として意識されてくるにつけ、その信仰指導者も急速に仏教化して、それにつれて伊勢路から紀伊路へと巡礼路も変わっていったというのが正しく明恵当時の姿というべきなのであろう。

そのあたりの姿を示す例としてよく引用されるのが『靈異記』下巻第一の永興禅師の説話^⑬であろうが、そのような内容に関わって明恵『夢記』に類似する物語が伝えられており、明恵と「海の熊野」との関連を想起させていて興味深い。先に示した⑦がそれであるが、糸野御前ら紀州の人々と急峻の大磐石をゆくのである。一つ岩を互いの手も足も重ならんかとはばかり厳しい岩肌に取りすがりつつゆくのである。そのように現れる急峻険危の大磐石のイメージは、永興禅師を訪ねた一人の禅師が危険な断崖にある岩にしがみつきなから岩を巡る巡行をおこない、そのまま捨身して死後も法華経を唱え続けたという靈験譚を想起させるもの

であり、いうまでもなく山の熊野に淵源を持つものといふべきであろう。また⑦では断崖を抜ければそこは海辺であつたわけだが、急峻地とそれに直結する海というモチーフは実景としてもまた宗教的心象としてもまさしく熊野のそれである。永興禪師が熊野村に住んで山岳修行によつて呪験を得つつ、海岸では海辺の人をよく教化したという山と海との二面的な設定と響きあうものといつてよい。先に示した⑤⑥も明恵が隠遁した白上峯の実景を表わしたもののだが、それにも西海に臨んでそびえ立つ「大磐石」「高巖」との表現が与えられる。このような急峻の大磐石と海というイメージは明恵の物語に様々に現れて(⑭⑮⑯)、明恵のなかでそれはやがて天竺遺跡の様相とオーバーラップしてゐるのである(⑰⑱)。

⑭上人夢ニ大海ノ辺ニ大磐石サキアカリテ高クソヒヘ立リ、草木花果茂鬱シテ奇麗殊勝ナリ、大神通力ヲモテ大海ト共ニ相具シテ十町許ヲヌキ取テ、我カ居処ノカタハラニサシクト見ル、此夢ハ死夢ト覺ユ、来生ノ果報ヲ現世ニツクナリ(仮名行状・下巻47ウ 寛喜三年十月条)

⑮一、有大磐石高峯無極、海水自上流テ如瀧水、可慶殊勝之相アリ、对此歡樂云々(夢記第七篇 元久二年十月条)

⑯一、同八日夜於山峯見遙海上云々(夢記第十篇 貞元二年七月条)

⑰又西天処々ノ遺跡隔テ数万里ノ雲ノ外ニ拝見ス、滅後辺地ノ劣報ノ恨ミ深ク、悲シミ深シ、之二依テ、或ハ西域慈恩寺等ノ伝記ニ依テ、処々ノ遺跡ヲ檢ヘ、或ハ求法高僧巡礼ノ跡ヲ尋ネ、西天ノ境ヲ相像(ヲモヒヤ)ル、磐石ノ上ニハ千輻ノ光ヲ耀カシ、経行ノ跡ニハ花文異ヲ現ス、薩埵虎ニ施シ、達拏子ヲ与ヘシ跡、髪ヲ布テ泥ニ掩ヒ、偈ヲ求メテ身ヲ捨テシ地、斯ノ如ク遺跡弥綸セリ(上山本漢文行状・上巻18帳 原漢文)

⑱又天竺嚕崎那国ニ有大山、自山頂下レル事五六十里外ニ廻テ形キヒシクシテ如墻、先聖修道ノ靈跡多ク香華名草充滿セリ、西北ハ師子国ニ連レリ、其外ハ皆大海也、(梅尾明恵上人物語・33ウ)

このように急峻の大磐石と大海との連接するモチーフが明恵の物語に多く見られ、それは明恵憧憬の地たる天竺を連想させるものとして機能しているが、それらのイメージは直接的には紀州白上峯に喚起されるものであり、そしてさらに海と山の修験であるところの熊野に淵源を持つものであるとみたいのである。明恵の中で天竺と熊野とがイメージの上でどこかオーバーラップしながら存在しているのではないか。そして次のような記述もそのような明恵の世界観を顕著に映し出しているものではないかと思つてゐる。すなわち熊野・天竺・補陀落山、そして海という世界の構

造である。

①建久末ノ比、下向紀州ニ下向ス、湯淺海中ニ一嶋有リ各曰、
近島南北ニ相ヒ並フコト其ノ間三四許丁、北嶋ハ東西長ク南北短シ、南嶋ハ南北長ク東西短シ、陸地従リ一許里ヲ隔テ海中ニ峙リ、又南北二十許丁、鷹嶋、久禮嶋等有リ、西南ノ角ニ當リ、前ニ遙カニ四国嶋ヲ見ル、正シク西方ヲ望ムニ、海畔大虚ト相ヒ連レリ、西天境隔テ無シテ、恋慕ノ思ヲ通スルニ便リ有リ、上人、道忠僧都ノ十八九才比也ノ并ヒニ喜海ト、三人相共ニ彼ノ嶋ニ渡ル……彼ノ嶋ノ西面ニ庵ヲ結フ意趣ハ、観音ノ補陀落山ノ西面ヲ占ルコトハ安養本所事仏ニ帰順スルカ故也、彼ニ擬シテ西海眇茫トシテ五天ノ海ニ遙通ス、昼夜彼方ニ向カヒ、思ヒヲ本師釈尊ニ奉ラムカ為也……今海濱ノ景趣ニ准シテ彼ノ楞伽山ノ昔ノ儀ヲ想像ル、恋慕ノ心肝ニ銘シ、滅後ノ恨ミ腸ヲ断ツ、何レノ生ニカ紫金ノ姿ヲ仰ギ、何レノ時ニカ生身ノ形ヲ拝ム、悲嘆ノ思ヒ境ニ触テ、忘ルルコト無シ、又或ル時、同法親族数輩相ヒ伴ヒテ海中ノ嶋ニ渡リテ、数日ノ間止宿遊覧ス、遙カニ西海ヲ望ムニ、霞中ニ嶋有リ、彼ノ嶋ヲ天竺ニ擬シテ屢礼拝ヲ作ス、唱ヘテ云ハク、南無五天諸国処々遺跡云々、長幼上下同シク此禮ヲ作ス……遂ニ海底ノ群類ヲ拝ス、或ハ窟中或ハ嶋上ニシテ、陀羅尼ヲ誦シテ魚鱗ヲ加持シ、仏因ヲ結ハ

シム、上人所持ノ真言集中記ニ云ハク……願ハクハ海中魚鼈鯨鯢螺鱗等衆生、必ス當来世々ニ大恩ノ教主ニ値遇シ奉リテ、永ク愚癡ノ業ヲ断ツヘシ……(上山本漢文行状・中巻20〜24張、原漢文『梅尾明恵上人伝』などにも近似文脈あり)

観音菩薩の補陀落山に意趣を求めて嶋の西面に留まり、そこから遙か天竺を想うというのである。昼夜遠く西天に向かつてひたすら釈尊を偲び、それはあるときには同胞や親族とともに行われたが、彼ら一同はともに釈尊を思慕するだけでなく同時に諸々の海の衆生を救済すべく真言・陀羅尼を唱えさえるのである。明恵の釈尊思慕の念が感動的に述べられるくだり、『行状』の中でも特に華のあるところの一つであろうが、海に漕ぎいで嶋にあつて補陀落山にならいつつ、一族とともに海のものどもを賀ぎながら遠く釈尊を思慕するという姿は、まさしく「海の明恵」というべきか。

さて問題は天竺渡海願望の意味にかかわってくるが、熊野信仰を背景としてそれを見てくると明恵がその生涯にわたつて強く志向した「捨身」と必ず関連していることが知られると思う。そのあたりのことがらについては稿を改めて述べたい。小稿はその議論の前段階として、明恵のなかにある「海」をめぐるあれこれと、その背景として熊野信仰

の関わりに触れた次第である。大方のご批正をお願いしたい。

【注】

- (1) 高山寺典籍文書綜合調査団（一九八七）『明恵上人資料第三』（東京大学出版会）所収。

- (2) 同（一九七二）『明恵上人資料第二』（東京大学出版会）所収、施無畏寺藏本「高山寺明恵上人行状（甲本）」（いわゆる「仮名行状」、上山勘太郎氏藏本および高山寺報恩院藏本「高山寺明恵上人行状」（いわゆる「漢文行状」）。

- (3) 網野善彦（一九八九）「灰をまく」（平凡社『ことばの文化史・中世2』）

※ちなみに、明恵がその成立に深く関わった『華嚴宗祖師絵伝（華嚴縁起）』元晩絵に、竜宮からの使者として「海上に浮かぶ人」が現れる。それらの関連も興味深い。

- (4) 小泉武夫（一九八四）『灰の文化誌』（リポレポート）

- (5) 北見俊夫（一九七九）「海の怪異」（毎日新聞社『人物海の日本史10』）

- (6) 『甲子夜話』正篇巻二十六

- (7) 高山寺典籍文書綜合調査団（一九七二）『明恵上人資料第二』（東京大学出版会）所収。

- (8) 高山寺典籍文書綜合調査団（一九七八）『明恵上人資料第二』（東京大学出版会）所収。

- (9) この間の事情は次のような研究に詳しい。
田中久夫（一九六二）『明恵』（吉川弘文館）

奥田勲（一九七八）『明恵 遍歴と夢』（東京大学出版会）

- (10) 前掲（8）『夢記』該当箇所奥田勲による注。

- (11) 前掲（9）田中（一九六二）、奥田（一九七八）。

松本保千代（一九七九）『湯浅党と明恵』（宇治書店）
明恵上人と高山寺編集委員会（一九八二）『明恵上人と高山寺』（同朋社）

- (12) ここでは主として次のような研究を参照した。

五来重（一九六七）『熊野詣 三山信仰と文化』（淡交新社）
宮家準（一九八七）『大峰修験道の研究』（佼成出版社）
和歌山県立博物館（一九八五）『図録 熊野もうで』（同博物館）

豊島修（一九九二）『死の国・熊野』（講談社現代新書）

- (13) 「法華経を憶持する者の舌、曝りたる鬚髯の中に著きて朽ちざる縁 第一」、今昔、元亨釈書に同話あり。

- (14) 高山寺典籍文書綜合調査団（一九七二）『明恵上人資料第一』（東京大学出版会）所収。

※ちなみに明恵と阿弥陀仏の接点も次のとおりだが、やはりこの問題は観音信仰と併せて語られるべきで、そのあたりのことは別稿として用意することとしたい。

▼元仁元年（一〇一〇）冬楞伽山ノ峯ニ蟄居ス、其間ノ記録別ニアリ、余事ヲトメテ偏ニ坐禅入観ヲ勤トス、其間上人語テ云ク、坐禅思惟ノ間夕夢ニ恒ニ阿弥陀如来ヲ見奉ル（仮名行状・下巻31才）

▼西面持仏堂

奉懸安中央五秘密曼荼羅、左右両界、左右香象右、弘法左、

兩祖影像、又左南、右北、壁華嚴聖衆曼荼羅南、善財五十

五知識北、傍又金泥漢字阿弥陀三尊、聖衆曼荼羅西毘沙門、

善知識西兼康筆
(高山寺緣起・13才)